アジアで緊急医療活動を展開する菅波 茂氏
［AMDA＝アジア医師連絡協議会＝代表］

群を抜く行動力，現実主義に徹す NGOのネットづくりにまい進

行動力とリーダーシップでアジアの医師の間にネットワークを構築。
アジア・アフリカの各地で緊急救援医療活動を展開してきた。
阪神大震災でも救援チームを当日のうちに現地入りさせて活躍。
理想を掲げる半面，目標実現のためには現実主義に徹する。
NGO，政府，国連の連帯関係づくりを目指す。

1月17日未明に起きた阪神大震災。行政の対応の遅れが世間から非難を浴びているが，当日の夜11時30分に早くも現地入りし，緊急救援医療活動を始めていた日本のNGO（Non-Governmental Organization＝非政府組織）がある。岡山市に本部を置くAMDA（アムダ＝アジア医師連絡協議会）だ。

AMDAは震災7時間後の当日午後1時には救援チームの派遣を決定。同4時には医師3人，看護婦2人，薬剤師1人からなる救援チームを岡山から現地へ送り出した。チームは現地到着後，被害が大きかった神戸市長田区の区役所内にある保健所に拠点を構え，直ちに被災者が収容されている小学校などへ巡回診療を開始した。

その後も約50人の医師，看護婦，薬剤師らを送り込んで，24時間診療所の開設，メンタルクリニック（精神医療）専門スタッフの派遣など緊急救援医療活動を展開。震災から1カ月後の2月16日に被災地から撤収した。

このAMDAを率いるのが，代表を務める菅波茂。岡山市で菅波内科医院を開業している。本部で働くスタッフが「せっかちですから」と笑うほどスタスタと速足で歩き，常に何かをしていないと気が済まないという雰囲気を漂わせる。その一方で，相手の目をじっと見ながら自分の考えを早口で話す語り口には，聞く者を納得させる力がある。

菅波は今回の震災で，岡山のAMDA本部と長田区の拠点との間を車で行き来しながら，夜もほとんど眠らずにボランティア医師や医薬品緊急輸送の手配など，救援医療活動の指揮を執った。

「救援活動は最初の48時間が勝負。国は組織こそ大きいが，動き出すまで時間がかかる。国の活動が軌道に乗るまでは，私たちNGOが素早く動いて対応する必要がある」

第2次大戦時の写真でアジアに目

実は日本国内でAMDAが救援医療活動を展開するのは今回が初めて。1984年の設立以来，ルワンダやインドネシア，ネパールなど，アジアとアフリカを中心に緊急救援医療活動や長期の医療援助活動を展開してきた。

現在ではアジア15カ国に支部を持ち，日本だけで約240人の医師を含む約400人の会員を抱える。日本以外のアジア各国にも，ほぼ全員が医師である約200人の会員がおり，今年中にはブラジル支部を設けて中南米にもネットワークを広げる計画だ。

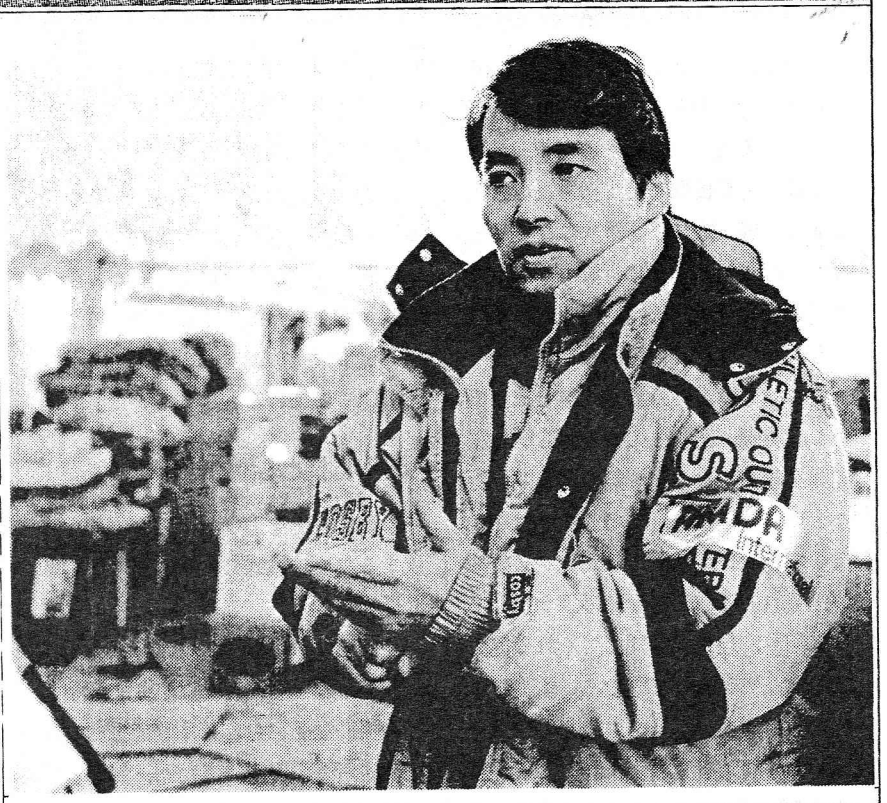
菅波は裁判官を祖父に，法学部出身の教員を父に持つ家庭に生まれ育った。謹厳実直な家風の中，菅波自身も，「高校までは祖父と父の後を追って法学部に進むつもりだった」という。だが，父の勧めもあり，国立大学の医学部と私立大学の法学部を受験。結局，「授業料が安かったから」という理由で国立大学医学部を選んだ。

AMDA 結成の原点は，菅波のアジアに対する思い入れにある。福山誠之館高校2年の時に見た第2次世界大戦時の写真が，菅波の目をアジアに向けさせる最初のきっかけになった。

「当時の私と同い年ぐらいの日本人兵士が1人，ニューギニアの浅瀬に顔を半分突っ込んで死んでいる写真だった。死に顔は安らかだったが，なぜ彼がアジアの片隅でこんな死に方をしたのか疑問だった。それ以来，アジアへのこだわりが，心の中でくすぶり続けた」

69年，岡山大学医学部4年の時に，インドやネパール，アフガニスタンなどアジアを1人で10カ月間放浪した。この経験が，アジアに対する菅波の思いを決定づけた。

「多様性にあふれ，えたいの知れない活気のあるアジアが大好きになり，医師としてアジアの人々に何か貢献できないかと考えるようになった」



菅波　茂（すがなみ・しげる）氏

1946年12月29日，広島県生まれ，48歳。77年3月岡山大学医学部大学院修了。同年4月岡山大学医学部第1内科入局。77年11月から81年3月まで心臓病センター榊原病院勤務。81年5月岡山市に菅波内科医院開業。84年AMDA（アジア医師連絡協議会）を設立し代表に就任，現在に至る。90年6月には菅波医院隣に老人保健施設「すこやか苑」開設。地元の地域医療にも力を注ぐ。知子夫人とは岡山大学在学当時，第2次クワイ河医学踏査隊（73年）で知り合う。

帰国後，菅波はアジアへの思いを具体的な行動に移す。72年，25歳の時には岡山大学クワイ河医学踏査隊を自ら企画。隊長として23人の隊員を率い，台湾，タイ，ネパール，インドを4週間歩いた。75年には大学内にアジア伝統医学研究会を設立。自らは顧問となり，タイやインドに調査隊を派遣した。さらに77年には西日本の医科大学にあるアジアに興味を持つサークルに呼びかけ，西日本アジア医学生連絡協議会を結成した。

転機が訪れたのは79年。国際問題化していたカンボジア難民を現地で救援しようと考えた菅波は，西日本アジア医学生連絡協議会の代表として医学生2人とともにタイに入る。ところが，菅波らのチームは思ったような救援活動がまったくできなかった。

「まず難民キャンプの位置がわからない。ようやくキャンプにたどり着いたら，今度は私たちを受け入れて活動させてくれる受け皿がなかった。ただ黙って難民を見ているしかなかった」

アジアの人々の手助けをするには，現地での情報収集と受け皿が必要――。この体験が，菅波をAMDA設立へと走らせた。

「日本だけで救援活動を考えていても意味がない。同じ思いを共有する現地の人々とネットワークをつくらなければならないと痛感した」

学生のころから踏査隊活動

80年にはアジア医学生国際会議を開催して，インドやタイといったアジアの医学生との交流を開始。国内でも，東日本の医科大学を交えたアジア医学生連絡協議会を設立して人のネットワークづくりに励んだ。

以後，毎年アジア医学生国際会議の開催を続け，医学生から医師となった仲間たちの受け皿として，84年にAMDAを設立した。

周囲の人々は，AMDAを率いて10年以上になる菅波を評して「一度

（写真：佐々木　義輝）

目標を掲げたら必ずやり遂げる人。そのための行動力とリーダーシップも備わっている人」と口をそろえる。外務省経済協力局民間援助支援室長の五月女光弘（56歳）は，「頼りになるリーダー。だが，あまりに行動力がすごすぎて，ほかのNGOから疎まれることもあるのでは」と半ばあきれる。

それほど菅波の行動力は群を抜いている。実際，医学生のころから医学踏査隊を組織したり，国際会議を開いたりといった活動は，並の人間にはなかなかできない。活動には資金が必要だが，それも菅波が足を棒のようにして歩き回り，趣旨に賛同してくれる協力者を探して調達してきた。

この行動力は，今でも少しも衰えを見せない。阪神大震災が起こる前，菅波は内戦が起きているロシア共和国内のチェチェンに救援活動に行くプランを立てていた。だが，派遣するメンバーは決めたものの，現地の情報はなく受け入れ先も決まらないため，計画を断念しかかっていた。

ところが，被災地で救援活動に従事していた時，モスクワから救援活動に来ていたロシア人医師レオニード・ロシャールと偶然，知り合う。菅波は知り合ったその日にAMDAの現状とチェチェン行きの希望を説明，ロシャールは即座にチェチェンの隣国イングシュにある受け入れ先の紹介を快諾して，トントン拍子にチェチェン医療救援プロジェクトの話が決まった。普通なら何週間もかかる交渉を，チェチェン救援のため，わずか1日でまとめたところに，菅波の真骨頂がある。

AMDAブラジル支部の責任者になる日系ブラジル人医師，秋山一誠（31歳）は，菅波との出会いで強烈なインパクトを受けた1人だ。

「菅波先生の知り合いの漢方医が，私の友人のそのまた友人だった。友人との会話の中で“NGOに興味がある”と漏らしたら，何日もたたないうちに菅波先生から連絡があった。会って話をしたら熱っぽく語り続ける語り口に圧倒された。2カ月後にはもうAMDAに加わると決めていた」

「政府，国連とも協力体制を」

菅波は理想を追う一方で，理想を実現するため，徹底した現実主義者の顔も持つ。

今回の阪神大震災に際し，AMDAは日本船舶振興会から活動費500万円の援助を受けた。日本船舶振興会は運輸省所管の財団法人だが，笹川一族が会の運営を切り回しているという批判が一部から出ている。このため被災地からも「AMDAは笹川さんのところからカネをもらったんだって…」と，活動の中立性を心配する声が出たという。だが菅波はこうした声にまるで取り合わない。

「緊急時に医療救援活動をするにはカネがかかる。もらえるカネなら出所は詮索（せんさく）しませんし，もらえるだけもらいます。船舶振興会が即日，500万円の援助を決定してくれたからこそ，迅速に行動を起こせたし，多くの被災者を救えたのです」

NGOとしての理想は高く掲げるが，「カネがなければ理想は実現できない」とはっきり認識している。

善意でボランティア活動をする人にも，心構えがなっていない場合は厳しくあたる。「緊急援助活動の時は，現場が混乱して劣悪な生活環境なのは当たり前。自給自足が原則だし，仕事も自分で探すもの。これらがわからないまま不満を言う人は，現場には来ない方がいい」と辛らつだ。ボランティアの自己満足より，救援活動が迅速に進む方が大切と割り切っている。

今，思い描いている夢は，「日本を含め，アジア各国に散らばるローカルNGO同士のネットワークをつくり，政府，国連とも緊急救援医療の協力体制を構築すること」。

すでに94年10月，AMDAの主催で「おかやま国際貢献NGOサミット」が岡山市を中心に開催された。政府機関・自治体も後援し，海外32カ国・44団体から代表約60人，国内を合わせると約270人が参加した。会場では，ローカルNGOのネットワークづくりについて活発な議論が交わされ，菅波の夢は実現へ向けて大きく動きだした。

この試みは阪神大震災の時に早くも実を結ぶ。AMDAはセスナ機とヘリコプターを使って岡山から被災地まで，医薬品の緊急輸送を実施した。この輸送ルートを確保したのは和歌山県航空協会。NGOサミットに参加していた団体だった。また，フランスを中心とする国際医療NGOであるMDMと，長田区で合同診療も実施した。このMDMも，NGOサミットにオブザーバーとして参加していた。「サミットでつくったネットワークが緊急時に役立った好例」と菅波は笑みを見せる。

法曹界を目指して受験勉強をしていた高校3年の夏，「シュバイツァーも悪くないな」という父親の一言がきっかけとなり，医師の道を選んだ菅波。今，アジアのシュバイツァーへの一歩を踏み出した。

＝文中敬称略（降旗　淳平）